

20 伊勢松阪の入目・入歯師

○新藤 恵久・長谷川 弥

紀州藩領の商業都市であった松阪の伊勢商人の家系から生まれた江戸後期の偉大な国学者本居宣長（一七三〇～一八〇二）は、六十八歳の寛政八年（一七九六）、鎌亭に送った書中に、入歯についての記載がある。そして次のような歌を詠んでいる。

〃思ひきや老のくち木に春過て かかるわが葉の又お
ひんとは〃

宣長の入歯を制作したのは津の入歯師と記しているが、やや時代が下がった頃、松阪に入歯師がいた。

入歯師柘植家の三代・順慶の筆記に「高祖・柘植光石

和歌山藩松阪在美濃田村ニ生ル

以農為業 年梢長シ家事不省 出テ諸国ニ流落シ後松阪

ニ住ス 自ら熊野屋助七ト称シ齒科手術ヲ業トナス 時ノ里正某勸ムルニ医術ヲ以テス 於是剃髪シ柘植光石ト改名ス 当時齒科ノ学ハ只一種浪人士ノ業ト為リ 俗間稱シテ香具師、薬師、居合抜ト云フ 香具ハ以テ香料ニ因シ 薬師ハ以テ自称家伝ノ妙薬ヲヒサグニ因シ 居合抜ハ以テ長刀ヲ自由ニ抜クニ因ル 故ニ學術進マス木石ノ類ヲ以テ僅ニ義齒ノ用ニ供ス 後略」とあり、この光石の代より医業のかたわら入歯作りをしていたという。二代・順教も光石の跡を継ぎ、三代・順慶は医術とともに木床義齒や義眼も作っていた。

順慶の長子・慶太郎は、明治廿五年医術開業試験により内科を開業し、次男伊之助は外科医となった。三男・正三郎は、明治廿七年、齒科医のもとに入門し、七年後齒科医となった年に夭折したという。

柘植家の菩提寺は松阪の清光寺であったが、寺の火災に逢い寺にあった柘植家の資料を焼失し、同家の墓石も破損が甚だしく判読は不可能となっている。また柘植家は戦災で一切の資料も焼失しており、その為、明治以前の柘植家の詳細を知ることが現在では困難である。柘植家は、慶太

郎の子・三郎（歯科医）の時、四日市市に移転したが、現在
柘植家には、和綴筆写本の「口中薬方帳」「口中療治薬方
帳」「神氏眼科学図」があり、治療手用器具として、抜歯
器具、口中治療器具、木床義歯制作用具が多数ある。ま
た、蠟石を台にガラス製の瞳をつけた義眼、「御口中薬」の
木製印、さらにゴム床の義歯、入歯入目師の看板、西洋入
歯の看板も現存している。また、順慶の三男・正三郎の歯
科医への入門にあたっての「約定證券」の写もある。

（日本歯科大学）

21 オーブンプループ並びにダブルル ープレラスプに就いて

平田 幹 男

部分的な義歯を口腔内に維持・安定させ十分に機能を営
ませるためには、クラスプの様な医師装置が必要である。
部分床義歯発達の一面は、従ってこの維持装置の発展の歴
史でもあった。演者は、これらの観点より第十八回、第十
九回日本歯科医史学会学術大会に於て、クラスプの発展史
について発表を行つて来た。今回も引き続き、クラスプの
一つの形態であるオーブンプループ並びにダブルループクラ
スプについて述べて見たい。

部分的な義歯を口腔内歯列に安定させる為のクラスプ
は、遊離端アーム型のクラスプが本来の形態として発達を
して来た。一腕鉤、二腕鉤、更には三腕鉤として夫々維持
力や目的により形態の違いを生みだしている。義歯の維持